あいの助密書

～愛・逢・I～の助

お陰様で第27号
発行所
有限会社猪木酸素
玉島店
ライフサポートあい
の助岡山営業所

明けまして おめでとうございます

皆様、明けましておめでとうございます。地域の皆様の暮らしを「陰ながらそっと支える」をモットーに日々活動中の有限会社猪木酸素玉島店ライフサポートあいの助です。年頭のご挨拶の代わりに、今年の干支である兎に関連したお話をしたいと思います。今年は十干十二支でいうと癸卯（きぼう／みずのと・う）です。

「癸」の意味　物事をはかる／筋道を立ててはかる、考える、処理する／筋道をなくすと自然に混乱し、ご破算にしなければならない事態になることから、均す（ならす）という意味にも用いる。

「卯」の意味　ぼう　という音で茅、すすきの茂みを表す／卯の字の二筋は門柱、両側は門扉を開いた形であり、従来手を付けていなかった未開拓地の開発に従事する形

そうした土地でまず目につくものは兎の類であろうことから卯が兎と解釈された由。

「癸卯」の意義　「万事筋道を立てて処理してゆけば、繁栄に導くことができるけれども、筋道を誤ると、こんがらがって、いばらや茅のように足掻きのつかぬことになる。その果ては混乱・動乱、あるいはぶち壊し・ご破算になるぞ」という意味になるそうです。

（拠出　安岡正篤著　干支の活学）

今年、弊社も倉敷事業所再スタートの年、身を引き締めて臨みたいものです。

続いて、跳びはねる兎の特徴にあやかって、歴代総理や財界のリーダーから師と仰がれた偉大な漢学者 安岡正篤先生の書籍から、足にまつわるお話をおひとつ。

安岡先生が中学生のとき、国語の授業で「楽しい」の語源を教わった。子供が母の胎内で手をかがめているが、その手を伸ばす、手伸ばし→てのし→たのし　縮まっているものを伸ばす、生命の伸長、これが「楽しい」の語源であると。その話に感心し、触発された聡明な安岡少年は、すぐにある疑問を抱く。「なぜ『たる』という言葉は『手る』と書かないで『足る』と書くのか」と。すぐに先生に尋ねたところ、「理屈を言うな」と一喝されてしまう。そこで、自分で調べようと試みるも一向に埒が明かない。長じて漢学者となり漢学の書物を片っ端から紐解くも判らない。そこで、漢学の本を漁って注釈を探るよりも、手の研究、足の研究をすればいいのだと思考を転換させる。つまり、医学上から手や足の研究をするのである。そんな折、安岡先生が主催した専門違いの人たちの集まり、今で言う異業種交流会のような集いで、ひょっとその『たる』への疑問の話を口にしたところ、ある医学者が卓を叩いて感心し始める。「それは面白い、いや実に文字というものはえらいものだ。昔の人は偉いなあ」そして、「今夜は革命的な一晩だ」とまで言って感心をしたのである。焦れた安岡先生は「一人感心しておらずに説明をして欲しい。僕は長い間そのことで苦労してきた」と伝えたところ、医学者による長広舌が始まった。（その医者によると）「人間の体で一番苦労しているのは足である。人間は寝ても覚めても大気の圧力、地球の引力、重力の圧力を受けている。何をしてもこの支配から脱することは出来ない。これに順応する一番楽な姿勢は横になることである。故に匍匐（ほふく）する動物は一番合理的な体勢をとっている。人間は立ち上がって前足を手にしたことから発達したのである。そうすることにより頭が発達したので、匍匐していると頭は無になってしまう。医者では患者の体力によって一定時間這わせる運動をさせるところがあります。これをやると物を考えようとしても考えられなくなり、非常にお腹がすくから、胃病など治ってしまう。実に良い運動です。文明から原始に返るのです。だから、禅寺などでは、盛んに雲水や小僧に拭き掃除をさせます。これをしていると、どんなに悩んでいる時でも物を考えない。頭を空っぽにして四足になって働くから、胃腸は非常によくなる、だから健康にはよいのです。ところが、立ってしまうと、脊椎という積み重ね方式のひょろ長い、あやふやな柱、それを腰で受けて、その下に二本棒を立てて倒れないようにしているので、実に不自然です。そして曲がったり脱臼したり、いろいろな障害を起こすわけです。しかも腰、脊椎は非常に重要です。これから神経・血管・リンパ腺などが全身に分布しているのですから、異常を起こすと体内はいろいろと変化を起こします。肝腎要（かんじんかなめ）の要（かなめ）は腰である。（肝腎は肝臓と腎臓）。昔の人が「腰抜け」と行ったのは名言であります。大体の人間は二十歳にもなると多少「腰抜け」です。三十、四十になると「大腰抜け」です。肩が凝るとか、胃腸が悪いとか、これは腰に異常があるためです。さらに悪いのは足である。足は心臓から出た血液が、そこへ降りてくることはできるが、それを順調に上に上げるためには、あらゆる努力を払っている。足の機能が完全になれば、ほとんど言うことはないそうです。健康である、すなわち『足る』である。病気などをしたりすると、まず足が駄目になる。フラフラする。足腰が定まらないということが、一番精神的にも肉体的にもいけない。そこで、足の機能を旺盛にする、完全にすることが、我々の終身の健康の必須条件である。だから『たる』という意味に用いたのである。」と。（一部省略）医学者は自身の治療術において足へのアプローチの重要性を悟り、安岡先生は、学問において「専門的愚昧」では駄目で、裾野が広くなければならぬと確信を得て締めくくられています。凡庸なわたくしは、この有難い訓話を「兎に祭文」にせず、「兎の上り坂」で社業の隆盛を祈るものです。

「兎の昼寝」を戒めて。